白金校舎学生スタッフ活動報告

2008 年度の白金学生スタッフは変化を起こしながら、これまでの学生スタッフならではの様々な、しがらみを打破してきた１年だった。

【時系列】

2007 年 9 月～12 月の 2008 年へ向けたチーフ交替の準備期間に学生スタッフの中で毎年同じように繰り返される問題（学年・学部による校地の違い・各学生スタッフの興味・関心の違い等）と先輩が行ってきた活動（詳しくは「ボランティアセンター報告書第４号　白金校舎学生スタッフ活動報告」を参照）を引き継いだ。今までの学生スタッフの活動に対して疑問を感じていた私は、2008 年度白金学生スタッフのチーフとして、現状を少しずつ変えていこうと大勢いる学生スタッフの組織の中でボランティア参加の呼びかけや学生スタッフの活動の方針（情報発信・つながり・ボランティア経験）を学生スタッフ内でのアンケートから提案したが、学生スタッフとしての意識やモチベーションの共有など、うまくいかず、活動は次第に形骸化し、活動も週に１回のミーティングや以前からの活動の引継ぎのみとなってしまった。

そこで 2008 年４月から新しく登録した学生スタッフ（新入生＋４年生）と前年度から登録していた学生スタッフの中で現状の活動に対して問題意識を感じていた人で協力して、今までの学生スタッフと違う新しい活動を目指した。その過程で学生スタッフ中心の６つのプロジェクトが立ち上がった（プロジェクト毎の詳しい報告については本書「白金校舎学生スタッフ活動報告」を参照）。新しい活動とはそれぞれの団体が自己完結していることなく学生×大学×外部機関との協働による活動である。具体的には、それぞれの代表を中心として活動していくが、互いのプロジェクトを全員が理解・協力しており、一般学生に対して勧誘することが出来るという“一蓮托生”という言葉が似合う団体運営スタイルで活動した。そのために毎週のミーティングで情報の共有を行い、学生スタッフ内で興味を持った人に対してもいつでも参加出来るようにした。

秋学期からは、夏休みの合宿で議論したことを踏まえ各プロジェクトを進行した。白金・横浜の両校舎で開催した「Do For Others サークル説明会」や明治学院共通科目「ボランティア学３」といった機会を通じて広報したり、メルマガや学生専用ポータルサイトポートヘボン、立て看板など、明学生に対して多角的にアプローチした。学生スタッフ内では毎週定例のミーティングを従来の教室から和室へ変更し、また定期的に各自ランチおかず一品持ち寄りのスタイルも行った。この場には李コーディネーター、教養教育センター猪瀬先生の参加もあり、学生×教職員が同じ目線でコミュニケーションを取るということを行うことが出来た。これらの過程で、白金学生スタッフ内では次第にプロジェクトの参加を通して、一般学生と地域をつなぐ活動を展開していく人、個人的にボランティア活動に参加する人に分かれていった。

【キーワード】

①仲間　――　今年度の活動において学生スタッフは仲間の大切さを実感したと思う。活動は自由と言われてきた従来の学生スタッフは、学生スタッフとして活動するかどうかも個人の自由だった。そんな状況で何かしたいというと思いから自分たちで“現場”を創り、そこで一緒に活動してきた仲間は、時にぶつかり、言い合いになることもあったが、本気で活動するからこそお互いにそのような関係が成り立ったのではないかと思う。また、人が増えることによって感情も様々になったが、その中で馴れ合いにならない、ちょうど良い距離感に気づくことも出来たのではないかと思う。ボランティアセンターには毎日誰か居て、情報共有から身近な相談、夢まで語り合える仲間が出来たことは2008年度の大きな変化ではないかと思う。

②今出来る最大限で最高なこと　――　各プロジェクトにおいて、人・物・金・情報・時間のそれぞれが限られた中で、その時に出来る最高のものを創り出す事を目指して活動してきたと思う。資源があるだけ良いものが出来ると思うが、そうではなく、その時にある資源を最大限に有効活用しプロジェクトを創り上げたことに意味があると思う。このような価値観は、実際にプロジェクトという“現場”を持って運営していく中で、外部の人との協働からその意識を感じ、自分のことをマネジメント出来るようになったからではないかと思う。

③素直な心・謙虚な気持ち　――　学年・学部・バックグラウンドがそれぞれ違う人達が交わり、新しいものを創ってきた中で、ポジティブで楽しいことを想像し、わくわく出来る素直な心を持ちながら活動をしてこれたと思う。頭の中で考えているだけでなく、時間があれば実際に現場に行ってみて自分の目で見てみるというフットワークの軽さも大切にしてきた。実際の活動においては、各プロジェクト、各スタッフそれぞれ問題にぶつかり、その度に失敗やつらい思いをしてきた。そのような時に強情になるのではなく、メンバー同士での相談や、教職員や外部団体の方からのアドバイスを受けることによって成功や乗り越えるきっかけを得たことから、相手に対する謙虚な気持ちを持つことの大切さにも気づけたと思う。

【今後の展望】

今年度は、「守・破・離」という段階の中で、学生スタッフ自身の主体的な活動を行うことが出来るようになった１年だった。ボランティアセンター学生スタッフの活動を先輩の代から行われ続けたものを引継ぎ、教えられた主体的な活動を「守」る段階。それを繰り返す中で行われてきた活動が現状のニーズ・自分たちのやりたいことと不一致であること気づき、学生スタッフの主体性を大切にして、これまでの活動を「破」り学生スタッフと様々な人達の協働による団体を立ち上げ、現場を創り上げた変化を遂げた段階。学生スタッフ自身が現場を運営することで、主体的な活動ということを意識しなくても行える「離」の段階。これらを経て、結果は「学生スタッフの活動が活発になった。」というように理解出

来るかもしれないが、その結果以上にこれらのプロセスの中で経験した、「理論と実践の繰り返し」ということが、学生スタッフの活動が変化を遂げるために大切だったのだと実感した。これらの活動は、今年度だからこそ出来た学生スタッフの活動であると思うので、現状の活動が今後もずっと適していくとは全く考えていない。大切なことは、結果よりも実際に活動して変化していく過程で「理論－実践」のバランスを考えながら、流動的で、その時々に適した変化をし続ける活動を行うことだと思う。

これらの活動を行う中で以前よりも学生スタッフの活動に興味を持ってくれる学生や、大学の教職員、また地域の人達との出会いが増えた。これは学生スタッフ自身の現場での活動から自分なりの言葉で学生スタッフの活動を説明することが出来るようになったためだと思う。そして、様々な人との出会いから学生スタッフの可能性にも気づくことが出来たと思う。今後もボランティアセンターとの協働パートナーの学生スタッフとして、「大学×地域×学生」をそれぞれ結びつけるときの、パイプ役として学生スタッフが活躍出来るのではないかと思う。それぞれが単体で自己完結の活動を進めるのでなく、協力できるときにはお互いの資源を持ち寄り、相乗効果を見込める活動が出来るのではないかと思う。その時に、協力できるきっかけを創ることが出来るのが学生スタッフになっていくのではないかと思う。

最後に、今後も学生スタッフ活動はさらに幅が広くなり、様々なバックグラウンドを持った人達が交わっていく場になると思うが、忘れてはいけないのは、おもしろい活動を目指し、常にわくわくする気持ちを持つことだと思う。なぜかというと、これまでの学生スタッフの活動においてそれが一番難しかったことのように自身が感じたからである。その気持ちを大切にしていれば、自然とそこに集まる人も同じように共感してくれる人だと思う。限られた学生生活の中でしか行うことが出来ない活動であるので、楽しむ気持ちを大切にして活動していくことを目指していきたい。

（白金校舎学生スタッフチーフ　３年　山田　純平）